

千艘秋男編

續撰吟抄

上

古典文庫

千艘秋男編

檣吟抄

上

古典文庫第五八〇冊

平成七年三月二十日印刷発行

非売品

編者 千艘秋男

上
発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

抄吟撰続

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座東京 〇〇一九〇一九一四五九七番

続撰吟抄

上卷

目次

凡例	五
続撰吟抄 一	九
続撰吟抄 二	三
続撰吟抄 三	一六
続撰吟抄 四	二三
続撰吟抄 五	三〇

凡 例

一、『続撰吟抄』（別称『続撰吟集』）は室町後期成立の和歌総集（または和歌類集）である。伝本としては、成立時の原型に近いと考えられる八冊本と、後代転写の際に、後柏原院と逍遙院（三条西実隆）との詠歌等を削除した三冊本との二系統が伝存する。

一、本書は、伝存本中、最善本と目される前田育徳会尊経閣文庫蔵『続撰吟抄』（八冊本）を底本として全文を翻刻した。

一、活字化に当たっては、可能な限り底本に忠実を期したが、概ね次のようにした。

1、漢字・仮名の別、送り仮名、仮名遣い等は原文通りとしたが、漢字は大体現行活字に、変体仮名は現行の平仮名に改めた。

2、宛字・誤字・脱字等は原文通りとしたが、明らかな誤字と認められる場合には、右傍に（ママ）を施した。また、詞書・奥書等には適宜読点を付し、

私注は（ ）に入れて示した。

3、踊り字は原本通りとした。

4、原文における見せ消ち訂正・補入は原文通りとした。

5、各歌に一連の算用数字番号を施し、索引の検索に便ならしめた。

一、丁移りは各巻の墨付から起算し、表・裏の改面及び改丁箇所を施し、その下に丁数を表わす算用数字とオ（表）・ウ（裏）の略号とをもって示した。

なお、丁移りは原本通りとしたが、行移りは必ずしも原態通りではない箇所がある。

一、上巻には『続撰吟抄』一―五を収めた。下巻には『続撰吟抄』六―八を収め、更に論考、初句索引を添えた。なお、初句索引は冒頭に凡例を記したので参照されたい。

一、本書を成すに際して、底本の翻刻と図版掲載とをご許可くださった前田育徳会尊経閣文庫の関係者各位に、厚く御礼申し上げます。また、御蔵本をご貸与、ご教示のうえ、出版のために種々のご高配をも賜った井上宗雄氏、同じく御資

料の提供、ご教示を賜った武井和人氏、御蔵本をご貸与くださった樋口芳麻呂氏に、深甚なる謝意を表する。

◇ 編者は平成三年度に東洋大学から「井上円了記念研究助成金」の交付を受けた。本書はその研究成果の一部である。このことを銘記して、関係者各位に感謝の意を表する。

平成四年六月十三日

千 艘 秋 男

続撰吟抄 一

御会はしめの御うたに 享禄五正五

毎山有春 御製

1 くる春の道し有世に足引のこなたかなたの雪やけぬらん

堯空

2 みても又またも都の朝かすみいくへの山かはるをあらそふ

卅首の哥中に

初春霞 雅世

3 朝日影にはひそめぬる霞より春の色こそあらはれにけれ

野子曰 、

4 姫小松ひきのゝつゝらくりかへしつきせぬ千代の春そしらるゝ

三首御懷昏に

永正十六五廿五

郭公帰山

後柏原院

ㄥ1才

5 さらに此なこりそふかき花はねに鳥はふるすのやま時鳥

樹陰夏風

、

6 下草の末葉もおなし風見えてもりこそ夏の影の涼しさ

水辺旅宿

、

7 船のうちにねぬ夜共なしあしの屋は跡も枕も浪のうへにて

時鳥帰山

親王御方

8 山ふかくかへるやおなしほとゝきす夕の雲の遠かたのこゑ

九月九日

享祿二

御製

9 にほへ猶けふ白菊の花の露かさしの袖の秋をかさねん

堯空

10 にきはへる民のけふりの秋をみむたかきにのほる今日を待えて

七夕草花

御製

「1ウ

11 をみなへし花もやけふに逢事はやすの河原の秋を重て

堯空

12 七夕のかさしにさすとはつ秋のけふ七草の花にさくらし

御月次御会に 享禄四五廿七

梅雨

御製

13 はれやられてことしさ月の雨も猶かさなる雲の空にみえつゝ

社頭

、

14 くもりなき天つ日つきを瑞籬のうけて久しき身にいのるかな

七夕御会に 享禄二

乞巧奠

御製

15 たき物の空にかしつる匂をや七夕つめの袖の秋かせ

堯空

「2オ

16 天川きえなんとする月影にかゝけやそへん秋の灯

御月次御懷紙に 享祿二五廿七

鶏

御製

17 影おほふ軒はの松も月も出ぬ木かくれて鳴夜半の水鶏に

扇

、

18 草木にはいつ吹いてん秋ちかき月の屋とりは閨のあふきを

灯

、

19 むは玉のよるのあそひは灯の花もうれしきひかり見すらん

題同前

堯空

20 とちはてし蓬かかとは水鶏のみたゝくに月のむかしおほえて

21 たちよりてならす扇の風をもや秋まつ萩の声にかさまし

22 おもふとちまれのまとゐは久かたの日影につきてむかふともしひ
「2ウ

七夕瑤琴

後柏原院

23 ことのねは南の風もうつり行秋にすゝしき星合の空

式部卿邦—親王

24 手向をくことのしらへや天川なかるゝ水も声をそふらん

実隆卿

25 天河浪^のをすけよ七夕のけふかすことを風にしらへて

政為卿

26 手向にもけふ逢ほしの妻ことやはつ秋かせのしらへなるらん

為広卿

27 今日といへは浪^のをすけて玉ことや引に手向の天の川かせ

晴御会の御うたに 大永五三廿四

花色春久 後柏原院

「3才

28 としをへて色香も花にます鏡かけていく世の春をちきらん

宮御方

29 さく花にのとかなる世をうつしてや春の心も色にいつらむ

葵

栄雅

30 かけてあふけ君かめくみに葵草言はの露の玉かつらして

郭公

、

31 此さとは山そめくれる時鳥まついつかたのねをかきくらん

はつね

舟

、

32 たのもしな岩ほをつみのおもきをもわたすにやすき船のちかひは

愚亭にて、花のさかりに來られて、

花のかけかは

堯空

33 とし／＼の名残を春も思ひしれた／＼けふのみの花の影かは

ㄥ 3 ウ

東山殿よりかへりける道に、すて子の侍るか、なき

やむをきゝて

栄雅

34 哀なり夜半にすてこの鳴やむはおやにそひねの夢やみる覧